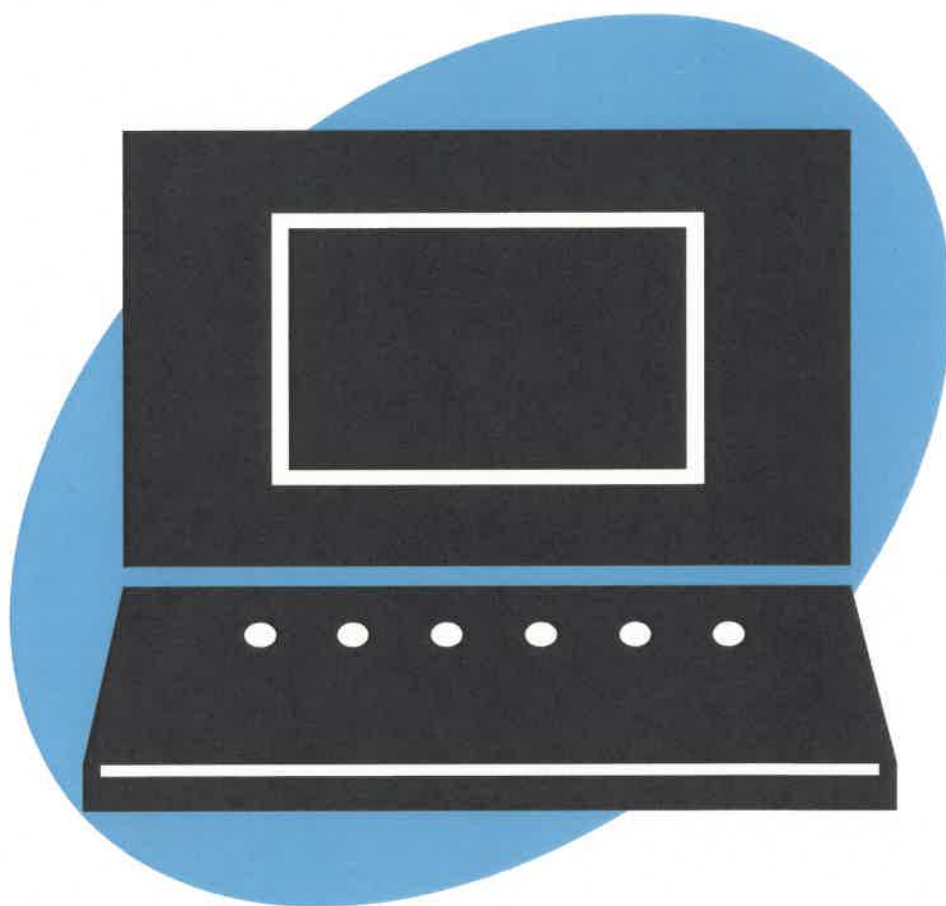


# 平成29年度 研究紀要

児童・生徒の豊かな人間性・社会性の育成をめざした、  
視聴覚・情報教育はどうあるべきか

—新しい教育メディアを利用した視聴覚・情報教育の実践—



相模原市立小中学校視聴覚教育研究会

# 目 次

はじめに 相模原市立小中学校視聴覚教育研究会 会長 浅野 宏

## I 研究概要

1. 研究主題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
2. 主題設定の理由・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1～2
3. 研究の重点・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
4. 研究経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3～5
5. 研究の全体構造・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

## II 研究内容

### 1. 研究部の実践

- (1) メディアリテラシー教育研究部・・・・・・・・・・・・ 7～13
- (2) ICT活用研究部・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14～24
- (3) 番組活用研究部・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25～31
- (4) 中学校部会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32～37

### 2. 事業部の実践

- (1) 放送コンテスト（小学校・中学校）・・・・・・・・ 38～40
- (2) 広報・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 41
- (3) ホームページ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 42

### 3. 渉外部の実践

- (1) 各種大会報告 夏季特別研修・・・・・・・・・・・・ 43～44

## III 今後の課題

- 今後の課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 45

あとがき 相模原市立小中学校視聴覚教育研究会 副会長 福田 雅一

# はじめに

相模原市立小中学校視聴覚教育研究会

会長 浅野 宏

今年度も本研究会へのご理解ご協力をいただきありがとうございます。おかげさまで、平成29年度の諸事業を無事に終了することができました。市内小中学校の校長先生方や教育関係機関の先生方、多くのご支援があつての成果と感謝申し上げます。

今年度も「児童・生徒の豊かな人間性・社会性の育成をめざした、視聴覚・情報教育はどうあるべきか ―新しい教育メディアを利用した視聴覚・情報教育の実践―」を研究テーマに、「豊かな感性と社会性を育てる視聴覚・情報教育」を研究の重点として、「メディアリテラシー教育研究部」「ICT活用研究部」「番組活用研究部」「中学校研究部」の4研究部が研究を行ってまいりました。前年度の「視聴覚・情報機器活用研究部」は「ICT活用研究部」に、「番組活用・校内放送研究部」は「番組活用研究部」に名称を変更しました。また、放送コンテストや広報活動（機関誌・HP）等の事業部活動にも積極的に取り組むことができ、市内教育研究組織としての役割を十分に果たすことができました。

各研究部では、独自の発想を生かした積極的な授業研究等が積み重ねられ、本研究会の特色である小・中学校一体の組織編成を活かした研究の連携が更に深まってきたことは、各理事（各校視聴覚主任）の努力の賜物であり、支えていただいた各校のご協力に感謝申し上げます。ありがとうございました。

さて、平成30年度関ブロ大会の開催も、いよいよ今年の11月に迫ってまいりました。実行委員会では、開催に向けた準備、調整が着々と進められております。しかし、何よりも大切なことは授業研究です。新たな教育の流れをしっかりと捉えて、相視研に関わる一人ひとりが確かな視聴覚哲学を持って、授業研究を実践的に進めていくことが、関ブロ大会に向けて最も重要なことであることに間違いはありません。

最後になりましたが、本研究会の研究推進にあたり、相模原市教育委員会、小中学校長会、関ブロ大会に向けて実践研究を進めていただいた東林小学校・鹿島台小学校・大野南中学校・相模女子大附属幼稚部・相模原中等学校をはじめ、「FMさがみ」や多くの関係諸機関の皆様にご指導ご協力をいただきましたことに心よりお礼申し上げます。

# I 研究概要

## 1. 研究主題

児童・生徒の豊かな人間性・社会性の育成をめざした、  
視聴覚・情報教育はどうあるべきか  
－新しい教育メディアを利用した視聴覚・情報教育の実践－

## 2. 主題設定の理由

現代のネットワーク社会において、コンピュータや携帯電話といった情報端末が誰にでも手軽に使えるようになり、生活の中になくってはならない存在になっている。それは子どもたちの生活にも大きな影響を与えている。その情報端末を使い世界中がネットワークで結ばれ、いつでもどこでも世界各地の情報をリアルタイムで収集することができるだけでなく、自らの情報を世界中に発信することもでき双方向の情報伝達が可能になり、人と人とのコミュニケーションツールにもなっている。

便利で手軽に利用できるという反面、その情報の一つ一つが持つ意味について正確に理解し、多くの情報の中から必要な情報を取捨選択するといった情報活用能力が必要とされていることも事実である。児童・生徒が十分に理解しないまま、溢れる情報に振り回され、犯罪に巻き込まれてしまったり、意図せずに加害者となってしまうりする危険性もありうるのである。

このような現実をふまえ、これからの教育では、広い視野と社会性を持ち、主体的・創造的に生きていくことができる心豊かな人間を育てていくことが求められる。そのため子ども一人ひとりが自分のよさや可能性を発揮して、自分の課題をもち、進んで考え、より良い判断をしながらそれを解決し、実現し、創造できるような資質や能力を育成していくことが大切である。

視聴覚教育の立場として、視聴覚機器や教材を通して学習意欲を引き出し、学力向上につながる視聴覚メディアを活用した学習活動を推進することがこの研究会としての大きな責務であると考えられる。子どもたちが学習の中で与えられる情報の受け手となる活動だけでなく、その情報の使い手あるいは作り手となって主体的な学習活動ができるように、教師が正確な知識を持って支援をすることが必要となってくる。自らの課題に対して各種メディアを効果的に活用し、情報を主体的に収集・整理し、自らの考えで処理し、自分の情報として獲得し責任をもって表現・発信していくという「情報活用の実践力」を育てていくこと、児童・生徒一人ひとりが主体的に調べ学ぶ方法を身につけるといふ「自ら学ぶ力」を育てること、さらに情報社会で生きる上で必要不可欠であるモラル面、安全面等の情報社会に参画する態度の育成が視聴覚・情報教育の果たす役割と言える。

また、平成29年3月に次期小学校学習指導要領が告示された。今回の改訂では、討論や発表などを通じた「主体的・対話的で深い学び」(アクティブ・ラーニングの視点)による授業改善や外国語の教科化、道徳の特別教科化などが明記された。そして、さらにはプログラミング教育必修化が謳われている。「言語能力」と「問題発見・解決能力」と並んで、「情報活用能力(情報モラルを含む。)」という文言が位置づけられ、より視聴覚・情報教育が担う責務の重要さが明確に表された。

本市においては小中学校の各教室等に大型テレビ・校内LANが配備され、さらにタブレットPCの導入も進んでいる。授業づくりという観点で教室環境が大きく変化し、新たな機器の導入も含め、この流れはこれからも続いていくだろう。「教育の情報化」が進む中で、視聴覚・情報教育は一つの専門分野であるだけでなく、授業づくりの土台にかかわる存在になりつつある。視聴覚・情報教育の今日的な役割を見据えながら、研究を進めていく。また、研究委嘱校においても、子どもの実態に応じ、効果的なICT活用を通して確かな学力を育む研究を今後も進めていく。

今年度、本研究会は「児童・生徒の豊かな人間性・社会性の育成をめざした視聴覚・情報教育はどうあるべきか」を基本テーマとし、具現化の観点として、次の3点を課題(サブテーマ)として取り組んでいきたい。

① 意欲と能力を育てる視聴覚・情報教育

子ども達自らが「学ぶ意欲」を持ち、学習に対して「主体的に対応できる能力」を育成するための視聴覚・情報教育のあり方を探る。

② 基礎基本の定着と個性を育てる視聴覚・情報教育

一人ひとりの個性を生かすために、視聴覚教育メディアを生かした基礎基本の定着と個性を伸ばす視聴覚・情報教育のあり方を探る。

③ 豊かな感性と社会性を育てる視聴覚・情報教育

子ども達の心情に訴え感動をもたらす視聴覚教育メディアを活用し、豊かな心と感じる心を持った児童・生徒育成への方策を探る。

### 3. 研究の重点

研究の重点として、『豊かな感性と社会性を育てる視聴覚・情報教育』を理想として取り組み、その成果と課題を明らかにしていきたい。そのために、各研究部での理論構築や着眼した発想を生かした授業研究を積み重ねていくことにより、検証を深めていく。

また、タブレットPCを始めとする情報機器の授業における活用方法を検証し、深めていく。そして本研究会の特色である小・中学校一体の組織編成を活かし、小学校3研究部と中学校部会の連携を更に深め、小中でのつながりのある研究を進めていく。

## 4. 研究経過

### <総会>

- 5月10日 大野台小
- ・平成28年度事業報告・決算の承認
  - ・平成29年度役員、事業計画及び予算の承認

### <企画会>

- 4月26日 大野台小
- ・研究部構成について
  - ・総会について

- 5月17日 教育会館理事室
- ・6月定例理事会の案件及び活動内容の検討
  - ・平成29年度研究計画の作成について
  - ・研究部及び事業部の構成について

- 6月28日 並木小
- ・7月定例理事会の案件及び活動内容の検討
  - ・神放協・県学視連合同夏季特別研修会 相模原大会について
  - ・放送コンテストについて  
(中学校放送コンテスト実施案内、小学校コンテスト要項作成に向けて)

- 7月27日 大野北小
- ・神放協・県学視連合同夏季特別研修会 相模原大会への準備

- 8月 3日 リサ高
- ・神放協・県学視連合同夏季特別研修会 相模原大会

- 10月 3日 並木小
- ・11月定例理事会の案件及び活動内容の検討
  - ・研究授業日程確認
  - ・関プロ大会について

- 11月 7日 並木小
- ・12月定例理事会の案件及び活動内容の検討
  - ・中学校放送コンテストについて
  - ・考える目(第69号)の発刊に向けて

- 12月 5日 大野台小
- ・1月定例理事会の案件及び活動内容の検討
  - ・平成29年度研究紀要について
  - ・考える目(第69号)の発刊に向けて

- 1月26日 大野台小
- ・2月定例理事会の案件及び活動内容の検討
  - ・平成29年度研究紀要について
  - ・小学校放送コンテストについて

2月14日 総合学習センター ・小学校放送コンテスト審査結果発表

3月 2日 並木小 ・平成30年度に向けて  
・関ブロについて

<理事会>

4月22日 鹿島台小 ・研究部所属希望調査  
・平成29年度年間計画について  
・小・中学校放送コンテストについて  
・平成29年度定期総会について

6月28日 並木小 ・年間計画の確認と組織確立  
・研究部研究推進  
・小・中放送コンテストについて  
・神放協・県学視連合同夏季特別研修会 相模原大会について

7月27日 並木小 ・神放協・県学視連合同夏季特別研修会 相模原大会への準備

8月 3日 リサ高 ・神放協・県学視連合同夏季特別研修会 相模原大会

10月 3日 並木小 ・研究部研究推進  
・小・中放送コンテストについて

11月 7日 並木小 ・研究部研究推進  
・放送コンテストについて  
・関ブロ 長野大会の報告

12月 5日 大野台小 ・研究部研究推進  
・考える目（第69号）の発刊に向けて

1月26日 大野台小 ・研究部研究推進

2月14日 総合学習センター ・講演『プログラミング教育をはじめとする今後の情報教育について  
～グローバルな視点で考えるこれからの社会で生きる力～』  
講師 レゴ エデュケーション 日本代表 須藤 みゆき氏

3月 2日 並木小 ・小学校放送コンテスト審査結果発表  
・入賞作品視聴  
・研究部研究のまとめ

<小学校放送コンテスト>

9月 募集開始  
1月 FMさがみ 審査依頼  
2月 FMさがみにて 審査会  
3月 各受賞校にて表彰

<神奈川県中学校放送コンテスト>

9月 募集開始  
10月 地区予選  
11月 決勝大会・表彰

<広報活動>

4月 平成29年度研究紀要発行  
3月 機関誌「考える目」(第68号)発行  
随時 相視研ホームページ更新

<神放協 県学視協 他>

6月 2日 神放協 県学視協「第1回 合同理事会・事務局会」  
ニュースパーク(日本新聞博物館)  
6月 3日 日本学校視聴覚教育連盟「理事会 研修会」  
東京ファッションビル  
6月 12日 関放協 関視連「第1回 合同理事会」  
長野県長野市 上水内教育会館  
8月 3日 神放協 県学視協「合同夏季特別研修会」  
神奈川総合産業高校  
10月 26日 関放協 関視連「第2回 合同理事会」  
長野県諏訪市  
10月 27日 神奈川県視聴覚・放送教育研究合同大会 長野大会  
諏訪市文化センター 等  
11月 3日 県中学校放送コンテスト 県決勝大会  
NHK横浜放送局  
2月 23日 神放協 県学視協「第2回 合同理事会・事務局会」  
NHK横浜放送局

<研究委嘱校>

5月 大野南中学校 研究委嘱及び打ち合わせ  
4月 平成30年度研究紀要にて、研究経過の報告



研究の全体構造

研究主題

児童・生徒の豊かな人間性・社会性をめざした  
視聴覚教育・情報教育はどうあるべきか  
—新しい教育メディアを利用した視聴覚・情報教育の実践—

意欲と能力を育てる  
視聴覚教育

基礎基本と個性を育てる  
視聴覚教育

豊かな感性を育てる  
視聴覚教育

メディアリテラシー  
教育研究部

児童の情報活用  
能力育成に関わ  
る研究

ICT  
活用研究部

授業改善を進め  
るための視聴覚  
・情報機器活用  
に関わる研究

番組活用  
研究部

校内における放  
送活動の実践や  
学校教育放送利  
用に関わる研究

中学校部会

各教科の授業改  
善を進めるため  
の視聴覚・情報  
機器活用に関わ  
る研究

情報モラル  
ハンドブック改訂班

児童の実態や、  
機器の変化に合  
わせた情報モラ  
ルハンドブック  
の改訂作業

研究委嘱校

○東林小学校 H28、H29

○大野南中学校・鹿島台小学校 H29、H30

## (1) メディアリテラシー教育研究部

### 1. 研究主題 「児童の情報活用能力（メディアリテラシー）の育成」

#### 2. 主題設定の理由

児童を取り巻く情報環境は、複雑化・多様化しており、ネットワークへのアクセスは、低年齢化し、携帯電話やスマートフォンの所持率も年々高まっている現状がある。そういった情報環境の中、児童がいかに主体的に情報を取り入れ、自分の考えをまとめ、発信していく力を養うことは、学校教育の大きな課題となっている。そこで、今年度も昨年度の研究を継続し、研究主題を「児童の情報活用能力（メディアリテラシー）の育成」とした。

児童生徒の情報活用能力の育成を図る情報教育の目標については、3観点8要素に整理されている。

情報活用の実践力	<ul style="list-style-type: none"><li>・課題や目的に応じた情報手段の適切な活用</li><li>・必要な情報の主体的な収集・判断・表現・処理・創造</li><li>・受けての状況などを踏まえた発信・伝達</li></ul>
情報の科学的な理解	<ul style="list-style-type: none"><li>・情報活用の基礎となる情報手段の特性の理解</li><li>・情報を適切に扱ったり、自らの情報活用を評価、改善するための基礎的な理論や方法の理解</li></ul>
情報社会に参画する態度	<ul style="list-style-type: none"><li>・社会生活の中で情報や情報技術が果たしている役割や及ぼしている影響の理解</li><li>・情報モラルの必要性や情報に対する責任</li><li>・望ましい情報社会の創造に参画しようとする態度</li></ul>

情報能力の育成を考える上で、高度な情報環境の中で、児童が安心安全に生活できるようにするためにも、情報モラル教育を推進する必要性は高まってきている。

相模原市では、そういった課題に取り組むために「情報モラルハンドブック」を作成し、全小中学校に配付し、情報モラル教育を推進してきた。メディアリテラシー教育研究部でも、平成24年度から情報モラルハンドブックの実践を通して、情報モラル教育の推進に取り組んできた。徐々に「情報モラル週間」などを設定し、年間計画の中で情報モラルに取り組む学校も増えてきている。

一昨年度は道徳の時間で心情面から情報モラルについて考える授業を行い、昨年度は、学級活動の時間で知識として情報モラルの理解を促す授業を行った。今年度は、情報モラルハンドブックが改定されたことも受け、「情報モラル 相模原プラン 2017」に関連させ、教科による情報モラルの指導の研究を進めていくことにした。

#### 3. 研究方法及び内容

『情報活用能力の育成』を主題に、情報収集などを行い、以下の研究を進めていく。

##### ① 情報モラルハンドブック以外の教材の活用について

情報モラルハンドブック以外の情報モラル教材について検討し、研究授業を行う。

##### ② 教科の時間を活用した情報モラル教育の研究

情報モラルの一部を「知識」として、児童に指導していく形の指導案を「情報モラル 相模原プラン 2017」にそって検討し、研究授業を行う。

#### 4. 研究経過

- 4月 部員顔合わせ、研究主題、内容の概要説明
- 5月 研究内容および年間計画の確認、授業者の検討
- 6月 授業の方向性の確認
- 7月 研究授業に向けての指導案検討
- 8月 県合同夏期特別研修会
- 10月 研究授業に向けての指導案検討、情報交換
- 11月 研究授業実施（鶴の台小学校 柴田教諭）  
研究授業を終えての研究協議、情報交換
- 12月 研究の成果と課題の整理
- 1月 研究紀要の検討
- 2月 全体研修（総合学習センター）
- 3月 研究のまとめ

#### 5. 研究内容

##### ①情報モラルハンドブック以外の教材の活用について

ジャストスマイルの「つたわるねっと」を使用し、チャット体験を通して児童にSNSに対する興味関心をもたせ、また利便性などを体感させた。

##### ②教科の時間を活用した情報モラル教育の研究

今年度は「相模原プラン 2017」の計画にそって、「知識を身につけるカリキュラム」の中から社会科の「くらしを支える情報」の単元と関連させて研究に取り組んだ。

研究授業は、鶴の台小学校の柴田溪介教諭（5年生）が行った。児童は、前時までにジャストスマイルの「つたわるねっと」の使用を通して、チャット機能についての体験、学習をし、本時は「チャット（SNS）を使うときに気をつけなければならないこと」に焦点を絞り、授業を行った。

授業では、教師が4つの悪い例を提示し、それぞれのチャットの改善点を児童に考えさせた。そして、それをもとにして児童が前時に取り組んだチャットのやりとりを見直し、振り返るという展開にした。授業の中で、児童からは、「相手の気持ちを考えて発言する」「いない人のことは話題に出さない」「人の悪口は言ってはいけない」など様々な改善点が出された。その後、自分たちのチャットのやりとりを振り返った際には「人にいやな思いをさせるようなことをしないように SNS を使いたい。」「SNS を使うときには、人をきずついたり、ケンカにならないようにする。」といった意見や気づきも多く見られた。

研究協議では、「社会科（教科）と情報モラルを関連させた授業の一例となった」「教科学習を通して児童の情報モラルを高めることができた」「教科として授業を行う以上、【やっていいこと】【やってはいけないこと】を指導してだけでなく SNS の特性を社会科の知識として理解した上で、利便性や危険性を話し合わせていく必要性がある」といった意見が出された。

# 社会科学習指導案

鶴の台小学校  
指導者 柴田 溪介

- 1 日時 平成29年11月6日(月) 5校時 13:55～14:40
- 2 場所 5年2組教室(北側校舎3階)
- 3 学年・学級 第5学年2組 39名
- 4 単元名 社会 下「暮らしを支える情報」  
「P24 情報を受け取り、発信するわたしたち」

## 5 単元について

### (1) 教材観

本小単元では、情報化の進展によって人々の生活がどのように変わったのかを捉え、情報化の進んだ社会の中で自分たちはどのようにインターネットなどの情報を扱っていけばよいかを考えていく。多くの子どもが、日常生活の中でインターネットをすでに体験している。その体験をもとに、インターネットのない生活を想像させたり、インターネットの利用に際して不安なことを想起させたりして、実際の生活に引きつけながら学習を展開していくことを心がける。

インターネットや携帯電話の急速な普及に伴って、SNSを中心に児童がトラブルに巻き込まれたりする事例が増加してきた。SNSを使ったコミュニケーションでは、匿名性が高いため、安易に情報を発信してしまいがちである。相手の顔が見えない状況だからこそ、受け取った側の気持ちを考えて伝えることが重要である。そこで、メールを題材にして情報モラルを問われる場面を設定し、情報の真偽を判断し、相手の立場に立ったコミュニケーションの大切さを理解させることをねらって主題を設定した。

### (2) 児童観

事前のアンケートによると、約8割の家庭にコンピュータがあると答え、そのうちほとんどの家庭がインターネットに接続できる環境にある。動画を見たりゲームをしたりするなどする用途で使用している。携帯電話の保持率は、自分用・家族との共有を合わせると全体の約6割であった。色々な情報ツールの家庭での保持率は、今後ますます増加することが予想される。

コンピュータに対する技能は、ほとんどの児童がローマ字入力ができるが、文字を打つスピードは個人差が大きい。スマートフォンやキッズ携帯でメールのやり取りを経験した事のある児童は半分以上である。

ライン等のSNSで連絡を取り合っている児童の中には、特定の人物を仲間はずれにする「ラインいじめ」に近いトラブルに巻き込まれている児童もいた。まだ少数ではあるが、大きな問題に発展する可能性も大きい。携帯やパソコン等でラインやメールをすることに興味がある児童がほとんどであるが、危険性や課題も多くあると考える。

### (3) 指導観

本時の指導に当たっては、総合的な学習の時間に事前にジャストスマイルに入っている「つたわるねっと『チャット』」を使用して、メールのやりとりを全児童に体験させておく。その際に、メールを未体験の児童もいるため、児童全体の様子を見ながら活動を進めていくようにする。

導入では、メールのやり取りの体験を想起させながら、楽しかったことや便利な道具（情報ツール）であることをとらえさせる。その後、学習で実際のチャットでのやりとりを見返しながら自分たちの会話が適切だったか判断する。そして、問題がある点を話し合わせて、全体で議論していく。その後、メールをする時の正しいマナーについて知らせる。また、文字だけのコミュニケーションの中で、大切なことや心がけてなければならないことについて考えさせる。

本時の授業を通して、SNS の利用の際に気をつけなければならない点について考え、正しい知識を身に付けて欲しいと考える。

## 6 単元の目標

情報の発信者・受信者として気をつけるべきことや、情報を生活に生かしていくために大切なことを捉えられるようにする。

## 7 単元の評価規準

社会的事象への 関心・意欲・態度	社会的な 思考・判断・表現	観察・資料活用の 技能	社会的事象につい ての 知識・理解
自分の体験や様々な資料をもとに、SNS の利便性について意欲的に調べるとともに、利用に際して注意すべきことも積極的に考えを出し合い、話し合おうとする。	情報化が進んだ生活の中で、自分はそのようなことに気をつけて暮らしていけばよいか考え、表現している。	情報化の進展の様子や、生活にもたらず利便な点・不安な点などを、適切な資料を活用して読み取っている。	情報化が進んだ社会における携帯電話やパソコンの利便性や効率性などとともに、注意点や問題点についても理解している。

## 8 単元（題材）の指導計画・評価計画（12時間扱い、本時は4/12）

時	ねらい	主な学習活動・内容	評価の観点			
			関	思	技	知
1	情報と生活との関わりについて興味や関心をもち、調べる意欲をもつことができるようにする。	自分たちの身のまわりにはどのような情報があり、何を通して伝えられているか、イラストから見つけ出す。	○			
2 3	情報のやり取りをチャットを使って行い、チャットの利便性を実感する。	「つたわるねっと『チャット』」を使用して、メールの利便性について理解する。	○			
4 本時	チャットの利用の際に気をつけなければならない点について考え、自分の言葉で表現できるようにする。	前回までに行った「つたわるねっと『チャット』」の内容から、チャットでのやりとりの注意点や問題点について理解する。		○		○
5	緊急地震速報が届く仕組みなどを調べることを通して、大事な情報がどのように人々に伝えられ、生活に影響を及ぼしているのかについて、学習問題を立てることができるようにする。	災害時にはテレビや携帯電話を通じて、緊急地震速報など必要な情報がすばやく届けられる仕組みが整えられていることを知る。	○	○		

6	テレビのニュース番組が放送されるまでの様子を調べ、情報を伝える放送局のはたらきについて捉えることができるようにする。	テレビのニュース番組がどのようにつくられて放送されているのか、資料を読み取って調べ、分ったことを話し合っまとめる。				○	
7	災害時に人々がどのような手段で情報を入手していたのかを調べ、様々なメディアの特色や、それらを使い分けて情報を手に入れ、役立てることの必要性を捉えることができるようにする。	東日本大震災の時に役立ったメディアに関する資料などをもとに、自分たちが日頃、様々なメディアから情報をてにしていることを調べ、そのとくしょくや活用の仕方について話し合う。					○
8	放送局や新聞社で働く人たちがさまざまな注意を払って情報を発信していることなどを調べ、マスメディアの情報と自分たちの生活との関わりについて考えることができるようにする。	マスメディアが伝える情報の違いや影響について調べ、マスメディアが発信する情報と自分たちの生活との関わりについて話し合い、まとめる。			○		○
9	情報ネットワークを利用した図書館サービスの便利さについて調べ、他にも様々な場面で活用されている情報ネットワークについて、調べる意欲をもつことができるようにする。	自分の体験した資料をもとに、情報ネットワークを利用した図書館サービスを調べ、様々な場面での情報ネットワークの活用について話し合い、学習問題を立てる。	○	○			
10	情報ネットワークを利用した病院の取り組みについて調べ、患者や医師がどのように便利になったかを捉えることができるようにする。	情報ネットワークを利用した様々な病院の取り組みについて様々な資料を読み取って調べ、どのような便利さがあるのかをまとめる。			○	○	
11	情報ネットワークを利用した救急医療や医療情報発信の取り組みについて調べ、地域が一体となった医療情報ネットワークの広がりとその利便性について捉えることができるようにする。	情報ネットワークを利用した救急医療の取り組みについて、様々な資料を読み取って調べ、どのような便利さがあるのかをまとめる。			○		
12	図書館や医療分野以外でも情報ネットワークを利用している場面を調べ、自分たちの生活がどのように便利になっているのか、考えをまとめることができるようにす	情報ネットワークを利用した様々な例を調べ、情報ネットワークの活用について考えをまとめる。			○		○

9 本時の授業計画

(1) 本時の目標

本時の授業を通して、チャットの利用の際に気をつけなければならない点について考え、表現できるようにする。

(2) 本時の観点別評価規準

社会的な思考・判断・表現	社会的事象についての知識・理解
自分たちが行ったチャットでのやり取りを振り返り、自分たちはどのようなことに気をつけて暮らしていけばよいか考え、表現している。	チャットのやり取りの活動を振り返り、その利便性や効率性などとともに、注意点や問題点についても理解している。

(3) 本時の流れ

	学習活動と内容	指導上の留意点	【評価の観点】 (評価場面や方法)
つかむ 5分	1、前時の学習を振り返り、SNSの利便性について感想を発表させる。  2、教師が『チャット』の機能を使って書いたモデルを見せる。	・前時の活動を思い出しやすいように大型テレビに実際のチャットのやり取りを映す。  資料「教師の悪い例」	
SNSを使う時に気をつけなければいけないことを考えよう			
調べる 25分	3、グループ毎にどんな点に気を付けなければいけないのか、根拠をもとに発表していく。	・教師の提示した資料を元にSNSをする上で「気をつけなれないといけないこと」について意見を挙げるようにする。 ・話し合う観点がぶれないように、話し合う観点を児童に伝え、黒板に掲示しておく。 ・具体的に自分たちがどこの部分から考えを持ったか分かるように『～というやり取りから自分たちは～。』という発表ができるようにする。	自分たちが行ったチャットでのやり取りを振り返り、自分たちはどのようなことに気をつけて暮らしていけばよいか考え、表現している。【思】
まとめ 15分	4、今回の学習で学んだことを元に、自分たちの前回のチャットを見直し、改善点を見つける。  5、今回の学習を元にSNSを利用するときに気を付けなければいけないことについて理解する。	資料「前回行ったチャットのやり取りを撮影した写真」 ・前回のチャットをふり返る中で、特定の児童が批判されないように指導する。	チャットのやり取りの活動を振り返り、その利便性や効率性などとともに、注意点や問題点についても理解している。【知】

## 6. 成果と課題

今年度は「相模原プラン 2017」に関連させ、教科指導における情報モラルの扱い方について研究をしてきたが、そこから成果や課題が見えてきた。

成果としては、「相模原プラン 2017」に基づき授業を行い、そして、教科指導の中で情報モラルを知識として児童に理解させる一例を示せたことが挙げられる。日常の授業の中で、情報モラルに関する知識を学ぶ機会を設定していくのは、今後も大切な取り組みと言える。

課題としては、「各教科が目標とする内容」と「相模原プラン 2017」に記載されている「児童に身につけさせたい知識」との間にズレを感じたことが挙げられる。教科に即した指導内容と児童に情報モラルとして教えるべき知識をすり合わせ、単元計画や授業を練っていく難しさを感じた。



今日の児童を取り巻く情報環境を考えると、児童が情報モラルについて考える機会は少しでも多く増やしていく必要があるだろう。そこで、これまでの研究のように、道徳の時間や学級活動の時間で児童に情報モラルを考えさせるとともに、今年度の成果と課題を踏まえ、各学年で教科指導の時間も通して、情報モラルに関する知識を教えていきたい。また、その中で今年度、改訂された情報モラルハンドブックのさらなる有効活用を今後も研究していきたい。



## (2) ICT 活用研究部

### 1. 研究主題 「児童が ICT を主体的に活用できる能力の育成」

～コンピュータに意図した処理を行わせるために必要な論理的思考力を身につける授業研究～

### 2. 主題設定の理由

ICTの急速な発展は、グローバル化が進む経済社会に変革をもたらし、児童の日常生活やライフスタイルに大きな影響を与えている。そのなかで、児童の発達段階に応じてICTに適切に触れながら情報活用能力を育成することは必要なことである。相模原市では、平成21年に、小中学校に50インチの大型テレビとコンテンツサーバが設置され、平成25年より、PC教室の機器更新とタブレットPCの導入が順次行われるなど、教育現場のICT化が進んできている。本研究部では平成23年度より、これらの機器を効果的に活用するために、ICTを活用した授業研究を重ね、その可能性を考えてきた。また、教育現場にICTを取り入れることは、授業改善や児童の情報活用能力の育成につながり、教育の質・授業の質を向上することができると考えてきた。

2020年より全面実施となる新学習指導要領では、言語能力、問題発見・解決能力等の資質・能力にならび、情報活用能力（情報モラルを含む）の育成をすることが求められている。あわせて、各教科の特質に応じて、「ア：学習の基盤として必要となる情報手段の基本的な操作を習得するための学習活動」「イ：児童がプログラミングを体験しながら、コンピュータに意図した処理を行わせるために必要な論理的思考力を身につけるための学習活動」を行うことが求められている。しかし、その方法は具体的に明記されておらず、どのように実践すればよいか学校現場で試行錯誤している状況である。前年度までは、ICTを活用した授業改善を行ってきたが、本年度は学習指導要領の改訂や今後のICTの発展の状況も踏まえて、イの学習活動を展開するための可能性を探ることにした。

〈新学習指導要領 総則第1章3(3) 参照〉

### 3. 研究計画

- ①新学習指導要領が求めている学習活動の共通理解とプログラミングについての基礎知識の確認
- ②「コンピュータに意図した処理を行わせるために必要な論理的思考力」について研究部員で検討
- ③有効に展開することができる各教科・領域の検討・実践案の共有
- ④総合学習センター学習情報班のプログラミング研修への参加
- ⑤再度、有効に展開することができる各教科・領域の検討・実践案の共有
- ⑥研究授業・振り返り
- ⑦1年間の研究のまとめ

### 4. 研究経過

- 6月 研究の方向性の確認 プログラミングの基礎知識の確認と共通理解
- 7月 プログラミングの基礎知識の確認と共通理解
- 9月 研究授業に向けての教材研究・方向性の確認 実践報告
- 10月 研究授業に向けての指導案検討
- 11月 研究授業に向けての指導案検討 研究授業（当麻田小学校 井上教諭）  
研究授業の研究協議
- 12月 研究のまとめ（考える目の発行について）
- 2月 研究のまとめ 研究の反省
- 3月 研究のまとめ（研究紀要の発行について） 来年度へ向けて

## 5. 研究内容

### 【全体の研究】

学習におけるプログラミングを体験させる授業の可能性を探るにあたり、新学習指導要領の内容と“プログラミング的思考”（logical thinking）の共通理解から始めた。その後、書籍や実践例などをもとに「コンピュータに意図した処理を行わせるために必要な論理的思考力」を身につける授業案の情報交換を行った。あわせて、プログラミング言語（グラフィック型、テキスト型）や実践の共有を行い、研究部員のプログラミングの基本的な知識を深めていった。

実践を考えるにあたり、「コンピュータを使ってプログラミングを体験させることを目的とした実践」「アンプラグド（電源を使わない）でプログラミング的な考え方を体験させる実験」「プログラミングの仕組みや身近なものにプログラミングが使われていることを学ぶ実践」の大きく3つの実践が挙げられた。検討を行っていくうちに、小学校段階では、グラフィック型のプログラミング言語（スクラッチ・プログル・プログラミンなど）を使用し、児童にプログラミングを体験させることで自然と「コンピュータに意図した処理を行わせるために必要な論理的思考力」を育むことができるという仮説を立てた。（挙げられた具体的な実践案とソフトウェア）

- ①スクラッチ、プログルを使用した算数科図形の授業
- ②「プログラミン」を使用した国語科の詩やことわざの授業
- ③ソフトを使用せず調理の手順を考える実践授業

### 【研究授業】第5学年算数科「図形の角度を調べよう」

研究授業は、当麻田小学校井上有希教諭がプログラミングソフト「プログル」を使い授業を行った。既習事項である多角形の角の大きさの和をもとに、ロボットを動かす角度を計算で求め、ロボットを動かすという学習内容であった。本単元では、分かっている角度から未知の角度を求めることができるという算数科のねらいを達成する過程で、プログラミングを有効に体験させることができると考えた。また、プログラミングを使うことで、「角度を求める活動への意欲を高めることができるのではないか。」「実際にはかくことが難しい多角形への図形の感覚を養うことができるのではないか。」「多角形は角が大きくなると円に近づくということを視覚的に感じさせることができるのではないか。」など、本単

元にプログラミングを取り入れる利点があるのではないかと考えた。

導入では、多角形の内角の和を可能な限り押さえ、学習活動につなげた。展開では、正多角形の定義を確認し、正多角形の内角の求め方と外角の求め方を児童の言葉で引き出し、①【角度の大きさの和】 $\div$ 【角の数】＝【1つの角の大きさ】②【 $180^\circ$ 】－【1つの角の大きさ】＝【ロボットを動かす角度】を確認した。その後、それぞれが正六角形、正五角形をロボットにかかせ、自由な正多角形をかくために計算を行った。終末では、それぞれが求めた式とロボットにかかせた図形を児童用パソコンの「発表」の機能と、一人ひとりもっているホワイトボードを使い発表した。

## 6. 研究授業

# 第5学年 算数科 学習指導案

相模原市立当麻田小学校

指導者 井上 有希

1、日時 平成29年11月24日(金) 5校時

2、場所 PC教室

3、学年・学級 第5学年2組 37名

4、単元名 『図形の角度を調べよう』

5、単元について

### (1) 単元観

本単元は、図形の性質を見だし、それを用いて図形を調べたり構成したりする単元である。三角形の内角の和は180度になるという三角形の性質を帰納的に考えたり、四角形や多角形の内角の和を図形の性質を見出すために演繹的に考えたりすることで、筋道を立てて考えることに興味を持たせるとともに、そのよさについても気づかせていくことができるようにしていく。また、演繹的に考えた内角の和を友だちと表現し合うことで、他の児童の様々な考えを読み取り児童の思考力や表現力の伸長を図ることができるようにしていく。

### (2) 児童観

児童は、課題に取り組むとき既習事項を生かして自力で解決しようとする姿勢が定着してきている。解決の過程についても図や式、言葉を使って表わそうとしている姿が見られる。ペアやグループによる学習では、自分との相違点や共通点、友達の考えのよさを見付けながら、お互いの考えを伝え合う姿勢が定着してきている。自分が、どう解決したのか言葉で説明する姿も見られる。説明が苦手な児童についても、グループの中で、「それは、どうやって考えたの」「その答えになったのは、何をどうしたからなの」など苦手な児童も自分の言葉で説明できるように言葉がけをすることが少しずつできてきている。

コンピュータに意図した処理行わせるために必要な論理的思考力を身につけるための学習活動については、「整数の性質を調べよう」の単元終了後に、プログラクを使い、復習として公倍数コースを1時間の時間で行った。やり方を説明の後、個々で取り組み、仕組みが分かると、お互いに教え合いながらステージをクリアしていくことができていた。「3の倍数を言わせてみよう」のところでは、どのプログラムを当てはめるか悩んでいた児童に対して、「倍数は、その数で割

るとどうなった？」と児童同士で問いかけていた姿が見られ、クラスの半分の児童が13ステージまで行くことができていた。

### (3) 指導観

#### 【単元について】

本単元では、内角の和が $180^\circ$ になるという三角形の性質や、内角の和が $360^\circ$ になるという三角形の性質を見つけ、それを用いて図形を調べたり構成したりすることがねらいとなっている。そのために、第1段階では、二等辺三角形の3つの角にきまりや角度の測定から「三角形の内角の和は $180^\circ$ になりそうだ」という推論を立て、様々な三角形の和を表にまとめながら調べることによってその推論が正しいことを帰納的な考え方により納得して理解させるようにする。また、実際に分度器でいろいろな三角形の内角を図ったり、平角が $180^\circ$ であることを利用して、3つの角を切り取って1点に集めたりするなど、具体的な操作にも重点を置き、図形についての感覚を豊かにしていく。

第2段階では、三角形の和が一定であることを学習したうえで、四角形の内角の和に目を向けさせていく。四角形を1本の対角線で2つの三角形に分割して考えるなど、三角形の内角の和が $180^\circ$ であったことを基にして、四角形の内角の和を演繹的に考え、友だちに説明する。その際に、図だけを見て考えたり、式だけを見て考えたりするなど、友だちがどのような道筋を立てて考えたのかを読み取り明らかにする話し合いをすることで思考力や表現力を育てていくようにする。

第3段階では、五角形、六角形などの多角形の定義を知り、それらの多角形の内角をもとめ、表にまとめることで、多角形の辺の数との関係を考察し、その規則性に着目させるなど発展的な学習ができるようにするようにさせる。

また、本時では、児童同士の問いかけもしながら全体で考えていけるようにしていきたい。

#### 【ICT活用について】

単元全体を通して、図形の性質に対する児童の理解を深めるために、授業のなかにICTを取り入れていく。全体への発表で児童一人ひとりの考えを全体に明確に伝えられるように、書画カメラを使用して大型テレビに写す支援する。また、学習内容や活動内容を明確にするためにデジタル教科書を大型テレビに映して全体で確認をしたり、図形を動的に変化させて児童の理解を深めたりする。単元最終段階では、『プログル』というソフトウェアでロボットに動きを指示し、ロボットの通り道に線を引かせ作図を行うプログラミングの体験を取り入れる。数量や図形についての感覚を豊かにし、表現する力を高めるだけではなく、コンピュータに意図した処理を行わせるための論理的思考力を養っていくようにしていく。

## 6. 単元の目標

三角形や四角形の内角の和について、図形の性質として見出し、それを用いて図形を調べたり構成したりすることができるようにする。

7、単元の評価規準

関心・意欲・態度	数学的な考え方	技能	知識・理解
筋道を立てて考えることよさを認め、三角形の内角の和が $180^\circ$ であることを基に、四角形や他の図形の性質を調べようとする。	三角形の内角の和が $180^\circ$ になることを三角形の性質と捉え、それを基に、四角形の内角の和について演繹的に考え、四角形の性質としてとらえることができる。	三角形や四角形の内角の和を用いて、未知の角度を計算で求めることができる。	三角形の内角の和が $180^\circ$ であることや四角形の内角の和は三角形にわけることによって求められることを理解する。

8、単元の指導計画・評価計画（7時間扱い、本時は5／7）

時	目 標	学 習 活 動	おもな評価規準
(1) 三角形と四角形の角 下 p.20～28, 141 4時間			
1	<p>〔プロローグ〕</p> <p>p.20 の円の半径を使ったいろいろな二等辺三角形をみて、3つの角の大きさの関心をもつ。</p> <p>所要時間は10分程度</p>	<p>○ア㉗～オ㉘の二等辺三角形を基に、三角形の3つの角の大きさのきまりを調べる。</p> <p>○ア㉗～オ㉘の二等辺三角形では3つの角の大きさの和が<math>180^\circ</math>であることを確認し、他の三角形についての見通しをもつ。</p>	<p>関 三角形の内角の和に関心を持ち、いろいろな方法で調べようとしている。</p> <p>考 三角形の内角の和を、三角定規の角の大きさを調べたり、いろいろな三角形の3つの角を1つの点に集めたりすることを通して帰納的に考え、説明している。</p>
2		<p>いろいろな三角形について、3つの角の大きさの和が<math>180^\circ</math>になることを確認する。</p> <p>三角形の内角の和が<math>180^\circ</math>になることを活用して、三角形のいろいろな角度を計算で求める。</p>	<p>技 計算で三角形の角の大きさを求めることができる。</p>
3	<p>○四角形の内角の和は<math>360^\circ</math>であることを理解し、計算で四角</p>	<p>角度をはからずに、四角形の4つの内角の和を求める方法を考える。</p>	<p>考 三角形の内角の和を基にして、四角形の内角の和の求め方を演繹的に考え、説</p>

	形の角の大きさを求めることができる。	各自の考えた求め方について発表し、検討する。	明している。 [技] 計算で四角形の角の大きさを求めることができる。
4	○「多角形」を知り、多角形の内角の和の求め方を考え、内角の和を求めることができる。	「五角形」「六角形」「多角形」の意味を理解する。 五角形、六角形の内角の和を三角形に分けて調べ、多角形の内角の和について表にまとめる。	[考] 三角形の内角の和を基に、多角形の内角の和を三角形に分けて求める方法を考え、説明している。 [知] 多角形の内角の和は、三角形に分けることによって求められることを理解している。
5 本 時	○学習内容の定着を確認し、理解を確実にする。	プログラミング教材を活用し、正多角形をかくプログラムを考えることで、図形の性質についての理解を深める。	[技] 内角の和をもちいて、正多角形の内角を求めることができる。
(2) しきつめ 下 p.29～30, 141 2時間			
6	○基本図形の敷き詰めを通して、図形に親しみ、その美しさを感じるとともに、論理的な思考力を高める。	折り込みにある一般四角形と同じ図形を並べて、すきまなく敷き詰める。 形も大きさも同じ四角形が敷き詰められる理由を考える。	[関] おもしろい敷き詰め模様を作ろうとしている。 [考] 形も大きさも同じ四角形が敷き詰められることの原因を考え、筋道立てて説明している。
7		平行四辺形の一部を変形して、おもしろい敷き詰め模様を作る。 *デジタルコンテンツがあります。	
まとめ 下 p.31, 131 1時間			
	【発展】巻末 p.131の「おもしろ問題にチャレンジ!」に取り組み、学習内容を基にじっくり考え、追究する。		

## 9 本時の授業計画

### (1) 本時の目標

- ・内角の和を用いて、正多角形の内角を求めることができる。(技能)

### (2) ICTについて

使用ICT 大型TV、ノートパソコン、プログラミングソフト「プログル」

### (3) 本時の流れ(5/7)

	学習活動と内容	○指導上の留意点 ◇ICT活用場面 ★評価
導入 (5分)	○前時までの振り返り ・多角形の定義を振り返る ・多角形の内角の和を振り返る	○可能な限りたくさんの多角形の内角の和をホワイトボードに掲示する。
展開 (35分)	○正三角形・正四角形の内角の求め方を式に表す。 ・ $360 \div 4 = 90$ ・ $180 \div 3 = 180$  ○「プログル」を起動し、stage4までを振り返る。  ○stage5を全体で考える。 内角の和をもとに正三角形の角度と外角を求める式を考える。 ・ $180 \div 3 = 60$ (1つの角) ・ $180 - 60 = 120$ (外角)  ○個人で内角の和をもとに正六角形	○児童に問い返し、「内角の和÷角度の数＝内角」の文字の式を提示するようにする。  ◇プログルを使うことで、児童にプログラミングを体験させるようにするとともに、角度を求める活動への意欲を高める。  ○事前にインターネットサイトを用意しておき、児童のPCに転送する。 ○前時に行った操作を思い出させるようにする。 ○「入力する角度はロボットの動く角度」を再度押さえる。 ◇外角を入力することに気づかせるために、1度、内角の $60^\circ$ を入力させる。 ○外角を求める式を文字の式で表し、板書する。  【内角の和÷角度＝内角】



	<p>の角度と外角を求める式を考え、求める。Stage6</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <math>720 \div 6 = 120</math> (1つの角)</li> <li>・ <math>180 - 120 = 60</math> (外角)</li> </ul> <p>○式を発表し、確認する。</p> <p>○個人で内角の和をもとに、正五角形の角度と外角を求める式を考え、求める。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <math>540 \div 5 = 108</math> (1つの角)</li> <li>・ <math>180 - 108 = 72</math> (外角)</li> </ul> <p>○自由に正多角形の内角と外角を求める式を考え、内角と外角を求める。</p> <p>【正九角形】例</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <math>1260 \div 9 = 140</math></li> <li>・ <math>180 - 140 = 40</math></li> </ul> <p>○グループ発表でかいた正多角形と式を説明しあう。</p> <p>○全体で自分がかいた正多角形と式を発表する。</p>	<p>【<math>180 - \text{内角} = \text{ロボットを動かす角度}</math>】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○友達同士で教え合ってよいことを伝える。</li> <li>○計算で求めることができたなら、プログラムの starge6 を行い確認するようにする。</li> <li>○正六角形の場合は、どうやったのかを振り返るようにする。</li> <li>○様々な正多角形にチャレンジできるように言葉がけをする。</li> <li>★内角の和を用いて、正多角形の内角を求めることができる。(ホワイトボード・観察・ノート) 【技能】</li> </ul>
<p>ま と め (5分)</p>	<p>○今日の学習の振り返りをする。</p>	<p>○PCを使い、児童の書いた図形を発表させる。</p>

## 7、成果と課題

### 【研究授業について】

成果として、「PCを活用したことで児童の意欲の高まりが見られた。」「正多角形の角の数が増えると円に近づくという気づきが児童から挙がり、今後の学習単位につながった。」「実際にかくことが難しい図形もコンピュータなら簡単にかけ、図形の感覚を養うことにつながった。」「角度の求め方が提示されたことで、児童は周りの子と協力しながら、ロボットに意図した動作をさせるための処理を行っていた。」「順序や計算の見直しをしたことで、プログラミング的思考を育むことにつながっていた。」「子どもたちにとってプログラミングへの入り口となり、とてもインパクトがあった。」という意見が挙げられた。

課題では、「プログルでロボットを動かすためには正多角形の外角を入力する必要がある、外角を求めることを子どもにつかませることが難しかった。」という意見が挙げられた。「外角を入力してロボットを動かすというプログルの性質をいかに5年生の算数科に取り入れるかが課題であり、児童の混乱を防ぐために、ワークシートを活用したり、ロボットの動きを実際に体験させたりするなど、手だてをすることも考えられる。」「今回の研究授業で論理的思考力をどの程度子どもたちに身につけさせることができたか検証する必要がある。」という意見が挙げられた。

### 【本研究を通して】

本年度は、学習指導要領で新しく導入されようとしている「児童がプログラミングを体験しながら、コンピュータに意図した処理を行わせるための論理的思考力を身につけるための学習活動」について研究を行ってきた。まずは研究部員がプログラミングについて考え、授業実践を試行錯誤しあったことが一番の成果だと言える。また、外国語や道徳の教科化にあたり、授業時数が限られるなかで各教科のなかでプログラミングを体験させる授業が展開できたことも大きな成果である。

課題としては、プログラミング的思考力、論理的思考力、情報活用能力などたくさんの言葉が挙げられるなか、研究部として、「コンピュータに意図した処理を行わせるための論理的思考力のとらえを考える必要がある。」という意見や、「教師がプログラミングについてもっと理解をしなければならない。」「プログラミングはあくまで手段であり、育みたいプログラミング的思考力を考えなければならない。」という意見が挙げられた。

また、プログラミングについて学ぶことで、児童が日常のなかの機械を見る目が変わってくる。その体験をさせるために、各教科・領域のなかでどのように展開していくことができるか可能性を考えていかなければならない。また、教科で扱う場合には、教科のねらいとプログラミングを関連させて展開していく必要がある。そのために何を示し、何を示さないのかを吟味し、授業づくりをしていく必要がある。

失敗してもそれを生かして何度もできることがプログラミングのよさである。プログラミングを通して、児童の学びが深まることを目指していきたい。

月 日 .

年 組 組 ( ) .

～ 角の大きさの和 ～

角の数	3	4	5	6	7	8
角の和	180°	360°	540°	720°	900°	1080°

角の数	7	8	9	10
角の和	1260°	1440°	1620°	1800°

～ 口字に上を閉じた角の和を求める公式～

① ( ) ÷ ( ) = ( )  
 角の大きさの和      角の数

② 180 - [ ] = [ ]  
 - 口字に上を閉じた角の和

⑥ 正六角形をおかせよう！

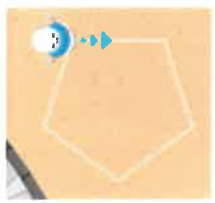


⑥ 正六角形をおかせよう！

① ( ) ÷ ( ) = ( )  
 角の大きさの和      角の数

② 180 - [ ] = [ ]

⑦ 正五角形をおかせよう！



⑦ 正五角形をおかせよう！

① ( ) ÷ ( ) = ( )  
 角の大きさの和      角の数

② 180 - [ ] = [ ]

★ 公式をつかき、いろいろな角の和をおかせよう！

⑧ \_\_\_\_角形、

① ( ) ÷ ( ) = ( )  
 角の大きさの和      角の数

② 180 - [ ] = [ ]

⑨ \_\_\_\_角形、

① ( ) ÷ ( ) = ( )  
 角の大きさの和      角の数

② 180 - [ ] = [ ]

⑩ \_\_\_\_角形、

① ( ) ÷ ( ) = ( )  
 角の大きさの和      角の数

② 180 - [ ] = [ ]

### (3) 番組活用研究部

#### 1. 研究主題 「授業実践における放送番組の効果的な活用」 ～子どもたちが“わかる”授業を目指して～

#### 2. 主題設定の理由

近年、「NHK for school」番組の充実が目覚ましい。これは、次のような2つの理由から言える。

第一に、番組の内容の工夫である。番組を視聴することで学習内容が完結する知識提供型の番組の充実はもちろんであるが、子どもたちへの「問いかけ」で番組を結び、深い理解につなげる構成の番組も多くなっている。

第二に、インターネットとの連携である。「NHK for school」のホームページにアクセスすると、どの番組も即座に視聴することができる。また、番組活用授業プラン、ワークシートも用意されている。番組の内容に関連した動画クリップやドリル、ゲームなどのコンテンツもあり、授業者の様々なねらいや授業内容に即して活用できるように工夫されている。

また、パソコン教室の児童機を普通教室に持ち込んで使うことによって、「NHK for school」を活用しやすくなった。普通教室で使用することで、いつでも「NHK for school」にアクセスして番組を視聴したり、クリップ動画を活用したりできるようになった。

これらのことから、本研究部では「NHK for school」のさらなる効果的な活用を行うことで、子どもたちが“わかる”授業を目指していきたいと考え、本主題を設定した。

#### 3. 研究方法及び内容

本年度は昨年度までの研究を踏まえ、以下に挙げる点を留意しながら、より実践的な活動を通して研究を重ねてきた。

- ①授業における放送番組活用の実践・研究
- ②放送番組、クリップ映像、ワークシート集の有効な活用方法
- ③新しい放送環境（地上デジタル放送、コンテンツサーバー、タブレット等）に関わる情報交換
- ④研究委嘱校との連携
- ⑤メディアリテラシー教育研究部とICT活用研究部との連携

#### 4. 研究経過

- 6月 研究計画立案
- 7月 夏季特別研究会に向けて、実践に向けて①
- 8月 夏季特別研究会
- 10月 実戦に向けて②

- 1 1月 実践に向けて③
- 1 1月 実践に向けて④
- 1 2月 各実践を通しての反省
  - 1月 NHK for school アクティブラーニング実践ワークショップ  
各実践を通しての反省、関プロ大会について
  - 3月 研究のまとめと今後の研究課題・年間反省、関プロ大会について

## 5. 研究内容

本年度は、昨年度の研究を受けて、授業における番組の効果的な活用をテーマに研究を行うことにした。昨年度の研究から、番組を部分視聴しながら授業を進めていくと、子どもたちの学習への関心が高まっていくことがわかった。しかし、パソコンでなければ、部分視聴や分断視聴をすることが難しいということが課題であった。近年、各校にノート型パソコンやタブレットPCの普及が進んでいる。校内LANも整備されているので、ノート型パソコンやタブレットPCを各教室に用いて、容易にインターネットを活用することができるようになってきている。こういった環境を利用し、ウェブサイト「NHK for school」の番組動画を授業に用いて、番組を視聴しながら子どもたちの学習への興味・関心を高め、理解を深めていくことが本年度の研究のねらいである。また、ウェブサイト「NHK for school」では、番組動画や動画クリップ、番組活用授業プラン、ワークシートなど周辺コンテンツの充実も図られているので、簡単に授業に用いることができる。45分間の授業時間の中で活用しやすくした番組構成となっており、コンテンツの充実によってこれまで以上に番組活用の幅が広がり、子どもたちの学びに大きな期待ができる。4月から研究員一人ひとりが「NHK for school」の番組を活用した授業実践を行い、情報交換を行いながら、研究を深めていった。

## 第1学年 国語科学習指導案

授業者 九沢小学校 小柳 和也

- 1 日 時 平成29年11月21日（火）5校時 13:55～14:40
- 2 場 所 第1学年1組教室
- 3 学年・学級 第1学年1組 30名
- 4 単 元 名 「遠足で楽しかったことや嬉しかったことを伝えよう」  
NHK for School ことばドリル「うれしくて たのしくて」

## 5 単元について

### (1) 国語科の目標

相手に応じ、身近なことなどについて、事柄の順序を考えながら話す能力、大事なことを落とさないように聞く能力、話題に沿って話し合う能力を身に付けさせるとともに、進んで話したり聞いたりしようとする態度を育てる。

### (2) 単元目標

遠足で嬉しかったことや楽しかったことをより詳しく伝えることができる。

### (3) 教材観

#### ①学習指導要領の記述

「話すこと・聞くこと」

ア 身近なことや経験したことなどから話題を決め、必要な事柄を思い出すこと。

イ 相手に応じて、話す事柄を順序立て、丁寧な言葉と普通の言葉との違いに気を付けて話すこと。

ウ 姿勢や口形、声の大きさや速さなどに注意して、はっきりした発音で話すこと。

エ 大事なことを落とさないようにしながら、興味をもって聞くこと。

オ 互いの話を集中して聞き、話題に沿って話し合うこと。

#### ②教材（番組）について

番組「ことばドリル」は、言語ルールをテーマに、子どもに身近な場面を通して、「初歩の読み・書き」の力を身につけることができる番組である。番組では毎回、「読み・書き」を失敗する場面を見せ、子どもの身近にある言語ルールに気づかせるねらいがある。本単元で視聴する「うれしくてたのしくて」は、嬉しい気持ちを伝える場面と楽しい気持ちを伝える2つの場面に分けられる。それぞれの気持ちを伝える時に「嬉しかった」「楽しかった」の一言で終わってしまい、相手に気持ちが詳しく伝わらない内容となっている。そこで、番組やドリルを通して、どのような言葉が必要なのか考えるようになっている。番組やドリル学習を通して、楽しみながら言語ルールを学習することができる。

### (4) 児童観

4月当初は、友だちの前で話すことに抵抗があり、スピーチでは言葉が出なかったり、下を向いてしまったりする児童が多く見られた。時には涙を流す児童もいた。そこで、全体ではなくペアでの伝え合いから始め、「できた」という話すことへの自信をつけるようにしてきた。5月頃になると全員が全体でのスピーチができるようになり、授業での発言も多くの児童が自信をもってするようになった。「話すこと」の指導では、顔を上げて聞き手を見ながら話すこと、SWIHなどの大事なことを落とさないよう話すことを指導してきた。これらができた時には、全体で認め、みんなで高め合ってきた。ペアトークやスピーチを積み重ねることで、わかりやすい内容となってきた。一方で、感想や気持ちを伝える場面では、「よかったです。」「楽しかった。」「嬉しかった。」と一言で終わってしまう児童が多く見られる。「何が」や「具体的にどう思ったのか」など感想や気持ちを伝えるための語彙

力が乏しい。本単元では、番組「ことばドリル」を視聴し、楽しみながら児童の語彙力を高めていきたい。

### (5) 指導観

スピーチのテーマをクラスの誰もが経験した「遠足」にすることにより、考えることが難しい児童や話すことが苦手な児童でも前向きに取り組めるよう設定した。本単元では、まずスピーチ原稿づくりを行う。5W1H に気をつけることや、遠足に行って嬉しかったこと、楽しかったことなど自分の気持ちを入れるようにする。スピーチ原稿を書き終えた後に、番組「ことばドリル」を視聴し、さらにドリル学習の活動を行う。活動を通して、気持ちをより詳しく伝えるためには、どのような言葉が必要なのかを考えていくことができる。単元後半では、始めに書いた原稿を見直し、気持ちをより詳しく伝えるために、言葉を変更したり付け加えたりする。書くことに時間が必要な児童もいるため、書き直すのではなく、その箇所に付箋を貼っていく。本単元の活動を通して、自分の気持ちをより詳しく伝えていくことのできる児童を育てていきたい。

## 6 単元の評価規準

国語への 関心・意欲・態度	話す・聞く能力	書く能力	読む能力	言語についての 知識・理解・技能
スピーチ原稿をより詳しく書くようとしている。	嬉しい気持ちや楽しい気持ちをより詳しく話している。			

## 7 単元の指導計画・評価計画 (4時間扱い、本時は3/4)

時	○目 標	・ 学 習 活 動	評価の観点				
			関	話	書	読	知
1	○遠足で楽しかったことや嬉しかったことのスピーチ原稿を書こう。	・ワークシートに遠足で楽しかったことや嬉しかったことのスピーチ原稿を書く。	○	○			
2	○嬉しい気持ちをより詳しく伝えるための言葉を考えよう。	・NHK for School「うれしくてたのしくて」を視聴して、	○				

		嬉しい気持ちを伝えるために必要な言葉を考える。					
3 本時	○楽しい気持ちをより詳しく伝えるための言葉を考えよう。	・NHK for School「うれしくてたのしくて」を視聴して、楽しい気持ちを伝えるために必要な言葉を考える。 ・スピーチ原稿を見直す。	○				
4	○スピーチ発表をしよう。	・スピーチ発表をする。	○	○			

## 8 本時の授業計画

### (1) 本時の目標

楽しい気持ちをより詳しく伝えることができる。

### (2) 本時の観点別評価規準

国語への 関心・意欲・態度	話す・聞く能力	書く能力	読む能力	言語についての 知識・理解・技能
	楽しい気持ちをより詳しく伝える言葉を考え、改善している。			

### (3) 本時の流れ

	学習活動と内容	○指導上の留意点	【評価の観点】 〈評価場面や方法〉
導入 (5分)	・前時の振り返りをする。	・嬉しかったことを伝えるために必要な言葉を確認するようにする。(掲示物の活用) ・遠足で嬉しかったことのスピーチ原稿を用意する。	



<p>展開 (35分)</p>	<p>○NHK for School「うれしくて たのしくて」を視聴する。</p> <p>※scene 7～scene 10まで</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・楽しい気持ちをより詳しく伝える時に必要な言葉を確認する。</li> </ul> <p>※ワークシート</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・他にどのような言葉があるかを考え、発表する。</li> </ul> <p>※どれくらい、まるで～のようだ等。</p> <p>○スピーチ原稿を見直す。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・個で考える。</li> </ul> <p>※付け加えや変更したい箇所に付箋を貼る。</p> <p>○スピーチ原稿をもとにペアの友だちに伝える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・模造紙にまとめていく。</li> </ul> <p>・付箋を用意し、付け加えや変更したい言葉を書き、原稿に貼るようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・どの箇所を付け加えや変更したのかを伝えるようにする。</li> </ul>	<p>【話】楽しい気持ちをより詳しく伝えることができる。(ペアワーク)</p>
<p>まとめ (5分)</p>	<p>○学習の振り返りをする。</p>		

#### (4) 参観の視点

- ・番組を活用することで、意欲的に活動することができていたか。
- ・番組を活用することが、語彙を増やすきっかけとなっていたか。

#### 6. 今年度の成果と課題

##### <研究授業>

番組を活用することで課題に対する意欲が高まり、子どもたちから多くの挙手が見られた。また、前時と同じ番組と活動の流れだったので、学習の見通しをもつことができたなど継続視聴の良さもわかった。ワークシートに書いた文からは、もとの表現から見ると自分なりに「楽しい」を表そうとしていた部分が見られ、語彙が増えたのがわかった。一方で、「涙がでるほど楽しかった。」など、文脈や状況、思いにあ

った言葉の選択は1年生に難しいものもあり、教師が整理していく必要があった。また、普通教室でパソコンを使って視聴することの良さに、番組を部分的に容易に視聴できる点がある。本時でも見せたいところを繰り返し視聴させることで、新しい言葉を習得したり、児童の語彙を増やしたりすることに効果的であったと考えた。

<今後の課題>

子どもたちの実態や授業のねらいに沿って番組内容を熟考すること、活用方法や場面を練り、授業展開を考えていくことが大切であることがわかった。これからもわかる授業をねらいにした、さらなる効果的な番組活用を探っていきたい。また、繰り返し視聴や、動画クリップの視聴などNHK for schoolを普通教室で最大限に活用するには、教室環境の整備が望まれることも話題にあがった。

## (4) 中学校部会

### 1. 研究主題

「ICT機器の効果的な活用」

### 2. 主題設定の理由

相模原市立小中学校視聴覚教育研究会では、校内 LAN やコンテンツサーバー、大型テレビを活用した授業実践を行うことで、生徒の学習意欲・関心を高めて、学びをより深いものとする教育的効果があるという報告がされた。また、これまで市内では書画カメラやコンテンツサーバーの改善など ICT 機器の拡充が行なわれ、ノートパソコンやタブレット端末の導入も進められている。

今後「わかる授業」を実現するため、次々に導入・整備されている ICT 機器を最大限に生かすことが教員の責務と考える。「わかる授業」を実現する上で、導入・整備が進められている ICT 機器の活用には大きな効果と可能性が期待される。現在の市内中学校の ICT 機器活用の状況、成果、課題を把握し、さらに効果的な活用方法を模索していくことを目指し、本主題を設定した。

### 3. 研究計画

- 5月 研究部員と役割分担の確認
- 6月 研究内容及び年間計画立案
- 8月 合同夏季特別研修会（神奈川総合産業高等学校）
- 10月 ICT機器活用の実践レポートの持ち寄り・検討、情報交換
- 11月 ICT機器活用の実践レポートの持ち寄り・検討、情報交換
- 12月 ICT機器活用の実践レポートの持ち寄り・検討、情報交換
- 2月 年間の反省、次年度への課題と方向性

#### 4. 研究内容

##### ① 各校における ICT 機器の活用について

各校から、ICT 機器の活用の実践事例を持ち寄り、協議を行った。協議の中で効果的であった事例をいくつか紹介する。

##### 【タブレット PC による実践事例】

タブレット PC を活用した実践事例を紹介する。タブレット PC は Windows が搭載されているタイプと iOS が搭載されているタイプに分けられる。

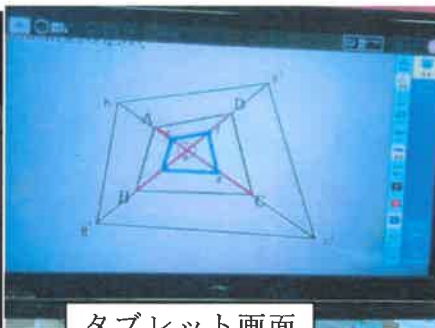
活用場面	数学 (Windows)
(主な活用例) ○ 2 次関数のグラフの考察。デジタル教科書のコンテンツを生徒に見せる。	
成果 (生徒の様子、変化)	○ グラフの特徴や点が動く様子について、説明をしなくても生徒からの意見をつなげることで授業を展開できる。
課題	○ 台数が少ないので、他教科との連携が必要である。 ○ ネットの規制がない。(生徒が使用しているとき、インターネットにつながるとどんなサイトでも閲覧できてしまう。)

活用場面	社会 (Windows)
(主な活用例) ○ NHK for school の利用をする。	
成果 (生徒の様子、変化)	○ インターネットのコンテンツのため、充実している。 ○ 映像を見ることで様々な思考を促すことができる。
課題	○ タブレット PC をネットにつなぐ場合、接続障害が起きるとその時間何もできなくなり、授業予定が崩れる。

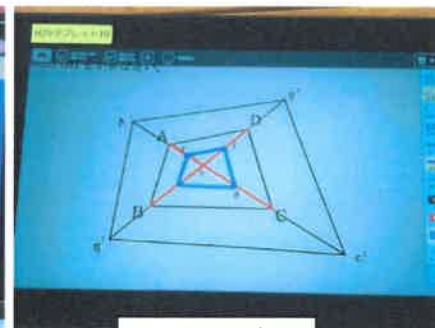
活用場面	家庭科 (Windows)
(主な活用例) ○調理実習で切り方などの映像を流すのに利用する。(家庭科)	
成果 (生徒の様子、変化)	○図や映像を見せることでイメージがわかりやすい。
課題	○台数が少ないので、他教科との連携が必要である。

・相模原市内で数校導入されているタブレット PC (OS:Windows) を使った事例である。持ち運びも便利であり、大型テレビに映す際には、ルータを介している。そのため、教室のどこからでもタブレット PC の画面を映すことができる。ルータを各教室の LAN ケーブルと接続することで、インターネットにつなげることもできるため、NHK for school などのコンテンツを生徒に見せることができる。搭載されている OS が Windows であるため、デジタル教科書を使って授業を進めることができることも魅力の 1 つである。

このタブレット PC は各校に数台、配置される予定であり、今後効果的な活用方法をお互いに情報交換していくことは必要とされる。



タブレット画面



テレビ画面

活用場面	数学 (iOS)
(主な活用例) iOS でダウンロードできるアプリケーション ○ AC Flip (文章の特定の部分や問題の答えなどを付箋で隠して生徒に見せる。) ○ MetaMojiNote (手書きで書き残せるノートアプリケーション。)	
成果 (生徒の様子、変化)	○図を見せたりなど、生徒の視覚的な部分で良いアプローチになる。 ○ AC Flip は文章に付箋をつけて、問題を作成。付箋をめくりながら、解答を確認することができる。
課題	○アプリによっては、慣れるまでに時間がかかる。 ○たまに不具合が起こる。

- ・現状で、学校に iOS が搭載されているタブレット PC を導入されている学校は少ない。個人で所有している機器を活用している状況である。配信されているアプリケーションで便利なものもたくさんあるため、活用されているものをいくつか紹介した。タブレット PC 撮影した生徒のワークシートなどをテレビに映すことができるため、1台で多くの役割を持って使えるところが魅力的である。

活用場面	数学 (iOS)
(主な活用例) ○授業で「ロイロノート」というアプリケーションを使用した。答えを導くまでに様々な解法のある課題に対して、グループ学習を行う。各グループの考え方を写真やカードにして、共有することができる。	
成果 (生徒の様子、変化)	○別のグループがどのように考えているのか共有することができる。 ○手元の画面で確認できるので、分からないところなどがあつた場合、再度グループの中で学び合うことができる。
課題	○書き加えた内容を瞬時に反映させることができない。説明をさせたい場合、不便である。 ○ネットワークに繋がっていないとできない。

- ・タブレット PC を使った授業の良さの1つが、互いの考え方を共有することができる点である。いろいろな考え方ができる課題であるほど、生徒にとっては新しい発見となる。各グループに1台ずつ配付すると、大型テレビでなく、手元の画面で確認ができるので、分からない点を仲間にきいたり、大切だと思うところをメモするために自分で画面を操作したり、書いたりできるところがメリットである。道具や環境が揃っていないとここまで行うことができないことが難点である。

活用場面	部活動
(主な活用例) ○部活動の練習中に、生徒のフォームを動画で撮影し、修正点をチェックした。	
成果 (生徒の様子、変化)	○その場で確認できるので、すぐに練習に反映させることができる。 ○コマ送りしながら、映像を確認できるので、細かい部分もチェックできる。

【デジタルカメラ・書画カメラ】

活用場面	教科指導（家庭科・音楽）
（主な活用例） ○調理の宿題発表、住まいの設計発表などワークシートを使った発表場面（家庭科） ○ワークシートの全体での共有、合唱を録画、鑑賞曲のイメージ画像を提示（音楽）	
成果 （生徒の様子、変化）	○映像などを見せることで、イメージしやすくなる。 ○細かなところに気づけ、視覚的に理解できる。 ○客観的に視聴するによって改善点を見つけやすくなった。
課題	○テレビで写したものと板書を併用する上で差別化をすることで更に効果的になる。 ○台数が少ない。

・各校に導入されているデジタルカメラや書画カメラなどを使った事例である。基本的には、ワークシートを全体で共有する方法として一番使いやすい機器である。準備することも少なく、手軽に使うことができるところが魅力である。デジタルカメラには、ハイスピード撮影機能もついており、撮影した動画をスロー再生することができるため、体の動かし方をスロー再生で確認する事も効果的である。

使用している機器	コンテンツサーバー
活用場面	委員会活動
（主な活用例） ○生徒会選挙の投票説明 ○各委員会の活動報告	
成果 （生徒の様子、変化）	○分かりやすく、投票を間違えることなく行えた。 ○各クラスのタイミングで全校に周知したい内容を知らせることができる

・教科指導だけでなく、委員会活動の中でコンテンツサーバーに保存されている写真や動画を見せることが効果的であるという事例である。学校によっては校内放送の調子が悪く、（アナログ放送のため）修理することが不可能ということでコンテンツサーバーに保存し、見せる学校も増えている。各教室のタイミングで見せることや見逃した部分をもう一度再生できることなどは、一斉で流す校内放送よりも便利な点である。

## ② 研究のまとめ

授業だけでなく、部活動や委員会活動においても大型テレビやタブレットの画面で視覚的に伝えることはとても効果的である。教員としては、黒板で説明する方法だけでなく、カメラなどの動画を使って、動きがあるものを見せたり、様々な資料を提示したりすることができる。生徒としても、ワークシートに書いた図や文章などを、書画カメラを通して見せたり、タブレット PC で写真などを送り合うことで考え方など共有することができたり、思考力を養う場面では効果的である。NHK for school やデジタル教科書などのコンテンツも充実している。

しかし、高価な機器やネットワークの環境が必要であること。また、機械であるため、正常に作動しないことがあるなどの課題もある。便利な ICT 機器が増えてくる中で、使い方が複雑なものも多くある。得意な人だけが活用するという状況にならないようにするためにも、ICT を活用した授業を積極的に公開したり、校内での研修会を開き、情報交換する場を多くつくる必要がある。



## 2. 事業部の実践

### (1) 放送コンテスト

#### 目的

- 校内放送の活性化を図り、創造性・主体性豊かな児童・生徒の育成を目指す。
- 児童・生徒の情報活用力や表現力の育成を図る。
- 教員の機器活用能力の向上を図る。

#### 【小学校の部】

##### ① 応募内容

###### 1. アナウンス部門

【課題】学校生活の中から素材を求めた内容とする。内容は、2分以内にまとめる。

###### 2. 朗読部門

【課題】次の指定作品を朗読する。作品のアレンジ・途中の省略は認めない。

《指定作品》『大造じいさんとガン』（光村図書 国語 5年）

教科書 124ページ12行目から129ページ3行目(最後)まで

###### 3. テレビ番組部門

【課題】今年度、校内放送用に作ったものに限る。作品は、3～5分でまとめる。

###### 4. ラジオ番組部門

【課題】学校生活から生まれたもので、テーマは自由とする。作品は、4分以内にまとめる。

##### ② 参加資格

- 市内小学校放送委員会に属する児童とする

##### ③ 審査及び表彰について

(株)エフエムさがみに審査を依頼し、同社の9名、本相視研より2名の審査委員により決定。

入賞校に賞状とトロフィーを贈る。作品制作に関わった児童には参加賞(賞状)を贈る。入賞校の作品は、春休みにエフエムさがみのラジオ番組内で紹介すると同時に、入賞児童の出演を予定している。

##### ④ < 第15回放送コンテスト審査結果 > 合計46作品 参加校21校 「 」…作品名

	作品数	<u>最優秀賞</u>	<u>優秀賞</u>	<u>FM HOT賞</u>
アナウンス部門	7作品	共和小学校 「給食ができるまで」	鶴の台小学校 「給食の放送」	
朗読部門	16作品	南大野小学校	共和小学校・清新小学校	光が丘小学校
テレビ番組部門	13作品	大沼小学校	清新小学校	南大野小学校・鶴の台小学校 「大沼小のなぞ」「開校63周年記念セレモニー」「放送委員会の仕事」「自然を探そう」
ラジオ番組部門	10作品	鶴の台小学校 「スマイルデーとワクワクタイム」	もえぎ台小学校 「5364」	鹿島台小学校 「FMカシマ”大喜利”」

## ⑤< 第15回放送コンテストを終えて…>

放送コンテストも今年度で、15回目を迎えた。これまで、株式会社エフエムさがみに協力をいただき、公正かつ、厳正な審査を行っていただいている。プロの目から評価していただき、アドバイスももらえるようになってから、その声を学校現場に広めていけるようになってきた。そのおかげで、作品に求められるクオリティーが年を追うごとに高くなってきており、作品づくりに尽力する学校も増えてきている。

2月7日の審査会終了後、審査委員のみなさんから各部門とも昨年以上に質が高い作品が多かったとの評価を得た。今回、初めて朗読部門で優秀賞が2校選ばれ、テレビ部門ではFMHOT賞（特別賞みたいなもの）が2校選ばれるなど、全体的に作品のレベルが上がっていることを証明する審査結果となった。

昨年度からエフエムさがみとの連携のなかで、放送コンテストのよさを相模原市内の小学校全体や地域全体にPRする活動をしていく案が出て、報道機関に情報提供をした。昨年度末には相模原市のタウンニュース（3月23日）で取り上げられ、優秀作品受賞校での表彰式の様子やFMさがみへのラジオ出演の日程などが掲載された。今年度末も情報提供を行っていく。

このような取り組みにより、作品づくりに関わる児童の創造性や主体性、表現力が高まってきていると共に、教員の技能も高まってきていると言えるだろう。昨年度以上に放送コンテストの取り組みが、市内の小学校の校内放送の活性化につながっていることもうれしい限りである。参加校や作品数が増え、質を高めていくことで、さらなる市内全体の小学校の校内放送が活性化することを期待している。

## 【中学校の部】

今年度も、平成29年8月18日に第34回 NHK 杯全国中学校放送コンテストの決勝が、東京の千代田放送会館にて行われた。予選の地方大会を含め全国から680校の参加があった。相視研の活動としては、神奈川県からエントリーがあった作品の審査および代表の選出、全国大会予選・決勝において委員として応募作品の審査などの運営に関わってきた。相模原からは相陽中、藤野中、田名中の8作品が3つの部門で全国大会へ選出されたが、決勝進出は果たせなかった。

また、11月3日、第37回神奈川県中学校放送コンテストが NHK 横浜放送局にて行われた。相模原市からは、アナウンス部門、朗読部門で予選を勝ち抜いた中央中、弥栄中、串川中、田名中の4校が決勝大会に進出し、アナウンス部門で串川中学校の生徒が優良賞に選ばれた。決勝進出者は NHK 横浜放送局のアナウンサーの方からもアドバイスを頂き、有意義な経験となった。

今後も相視研として両コンテストに積極的にとりくみ、相模原の代表を全国大会に参加させていきたい。そのためにも参加校の拡大と、応募のなかった NHK 杯のテレビ番組部門への進出を期待したい。

## (2) 広 報

1. 目 的 機関誌「考える目」・「研究紀要」を発行することにより、本研究会の研究概要を多くの教職員・他機関に広く知らせ、視聴覚教育の推進と意識の高揚を図る。
2. 発行日 「考える目」 69号 平成30年3月発行  
「研究紀要」 平成30年4月発行予定
3. 配布対象 「考える目」PDFにて作成 市内小中学校職員  
「研究紀要」PDFにて作成 相視研理事
4. 内 容 「考える目」  
・本研究会の研究内容の紹介  
・各種研究大会 発表報告 等  
  
「研究紀要」  
・研究部、事業部などの研究、活動内容の報告
5. 確認事項 「考える目」・「研究紀要」、共に年1回発行  
・「考える目」締め切りは1月上旬。  
・「研究紀要」締め切りは2月上旬。

### (3) ホームページ

1. 目的 相視研ホームページを作成することにより、本研究会の研究概要を多くの教職員に広く知らせ、視聴覚教育の推進と意識の高揚を図る。

2. 管理 内容の是非や著作権・個人情報に関わる許諾についての判断は会長が行う。ただし、ホームページのデータは総合学習センターのサーバー上で管理されているため、システム上の管理者は総合学習センター所長となる。定期的なホームページの更新を行う。

(URL : <http://www.sagamihara-kng.ed.jp/soushiken/>)

### 3. 内容

- ・ 考える目
- ・ 今年度の理事会の予定
- ・ 研修会・研究会の報告
- ・ 研究のあゆみ  
(各部の授業研究の指導演)
- ・ 放送コンテストの結果
- ・ 関係団体へのリンク 等



4. 今年度の活動 研究活動についても、各部の授業研究の指導演を蓄積していくことで研究の実績がだれでもわかるようにした。放送コンテストの要項や結果を掲載した。理事会の日程をトップページに載せることで、活動予定を分かりやすくした。

5. 今後の予定 年間の研究予定・各部の研究内容・募集などについて、よりリアルタイムに掲載していき、視聴覚担当やそれ以外の教員も含め、より多くの人の目にとまるようにしたい。また、相視研の沿革をまとめることで、これまでの研究の歴史を整理していきたい。

## 平成29年度 神奈川県放送教育・視聴覚教育 合同夏季特別研修会

平成29年8月3日、神奈川県立神奈川総合産業高等学校において神奈川県放送教育・視聴覚教育合同夏季特別研修会が開催された。

この研修会は、川崎市学校視聴覚教育研究協議会、横浜市学校視聴覚教育連絡協議会、相模原市小中学校視聴覚教育研究会、神奈川県学校視聴覚教育研究会連盟が、毎年夏に神奈川全県の教員を対象に合同で研修会をしているものであり、本年は、開催にあたり相視研が運営を担当した。

本年度は、研究主題を「自ら考え、自ら学び、未来を切り拓く子どもの育成～豊かな心と確かな学びを育む教育メディアの活用～」として、基調講演・分科会が行われた。

はじめに、NHK制作局第一制作センター青少年・教育番組部チーフプロデューサーの松瀬尚氏による「子どもが主体的に学ぶ番組活用」をテーマとした講演が行われた。講演では、NHK for schoolの今年度の新番組の紹介・ウェブのリニューアルについて・番組の活用実践について、それぞれ詳しい説明がなされた。



午後は、「放送教育」「視聴覚教育」「情報活用教育」の三分科会に分かれて、それぞれ活発な議論が行われた。

相視研では、第3分科会の「情報活用教育」の分科会において、相視研を代表して、近藤慎一郎教諭、村上一仁教諭（谷口台小）、小室絵美教諭（若草小）が「児童の情報活用能力（メディアリテラシー）の育成～情報モラルハンドブックの改訂と実践～」をテーマに提案を行った。

本提案では、相模原市で児童生徒の情報モラル教育を推進するため、相視研の中に「情報モラルブック改訂班」を立ち上げ、「情報モラル『相模原』プラン」に沿った改訂版ハンドブック「情報モラルハンドブック2017」の作成を行っていることを紹介した。具体的な授業実践として、小学2年生での学活「コンピュータの使い方」での、コンピュータの使い方を守らなければいけないことに気付かせる授業、また、小学3年生での社会科「わたしたちのまちしらべ」での、インターネットには、間違っただけの情報や古い情報もあることを学ぶ授業を紹介した。

協議では、相模原市の情報モラルハンドブックの使い方だけでなく、他市町村の情報モラル教育の実践についても活発な議論が行われた。

他市町村には、児童生徒の情報モラルを系統的に高めるための教材が少なく、相模原市全体で取り組んでいることを評価する意見が多かった。

また、情報モラルハンドブックを使って、小学校低学年から継続して必要な知識の積み重ねをしておくことは効果的であるとの意見もあり、相模原市の取り組みについて概ね高い評価を得ることができた。

指導講評では、相模原市総合学習センターの岡部指導主事より、相模原市では、「情報モラルハンドブッ

ク」を改訂し、全学校の全教員が簡単に実践できるように環境を整えることができたこと、情報活用能力を育成するために、今年度より、各校「学校の情報化推進計画」を作成し、各校の情報教育担当者が ICT 機器活用の計画を立てたり、情報モラルハンドブックを活用する情報モラル週間を計画したりしていること、課題として、全国的に ICT 機器の導入台数が増えているが、教員の ICT 活用を指導する能力には改善の余地が見られること、今後は、情報教育担当者が中心になって、情報モラル教育や ICT の活用を推進し、児童生徒の情報活用能力を育成することが期待されるとの話があった。

### Ⅲ 今後の課題

#### ○全体を通して

相視研ではさまざまな世代の視聴覚主任の先生方に参加していただいている。幅広い知識を研究部の場で提供していただき、それがより良い研究につながっている。時代の移り変わりと共に、新しい視聴覚機器が教育現場に導入されてきている。それと同時に以前と変わらず使われ続けている古い機器もある。新しい機器に柔軟に対応しつつ、古き良き機器を活用することも相視研理事の先生方の研究で可能になるのではないだろうか。年々変化するICT環境に対応し、児童・生徒が分かりやすい学びを作り上げるために教育実践を積み重ね、研究を進めていく必要があるだろう。

多くの学校でコンピューター室の機器更新が行われ、学校にはタブレットPC、実物投影機、ハイスピードカメラを始めとする多くの視聴覚機器が導入されている。これらの機器が効果的に活用できれば児童・生徒への教育効果を高めることができることはこれまでの研究でも明らかになっている。

教室を取り巻く環境の変化はこれからも続く可能性が大きい。このICT環境の変化のスピードや、情報機器の多様化で心理的に翻弄されないよう、さらに我々視聴覚主任は積極的に機器理解の推進を図る必要がある。

今回の学習指導要領の改訂で、先に挙げた「プログラミング教育」について、視聴覚・情報担当の方は、少なからず「何を教えるのか」「どうやって指導するのか」など、不安と焦りを感じている。今年度は、「まずはやってみよう。そこから我々自身が学んでいこう。」という姿勢で、ICT活用研究部において、授業実践が行われた。試行錯誤の中で行われた研究であったが、これからにつながる価値ある研究となった。

先に述べてきたように、「プログラミング教育」だけではなく、情報活用能力の育成が、これからの教育に不可欠であることは間違いない。そこで、我々相視研が担っている役割は、より重要になってきていると感じる。これから、より研究を深めていくことが必要である。そして、それを視聴覚・情報担当教員のみならず、我々が発信者として各学校で共通理解を図り、相模原市全体に広めていくことが、より重要な私たちの役目だと感じる。

次年度に向けて更に、授業を深めるためにICT機器がどのように役立つか、子どもの主体性を引き出すためにどの場面で活用すれば効果的なのか、など情報活用能力を育成するための研究を深めていきたい。

#### ○研究組織に関わる具体的課題

- ・次期学習指導要領に即した研究部の持ち方
- ・関プロ大会に向けての組織・運営

#### ○研究の内容に関わる具体的課題

- ・プログラミング教育をどの教科のどこで扱っていくのか
- ・情報モラルハンドブックや情報活用ハンドブックなどの積極的な活用
- ・NHK for schoolの番組やクリップを活用した特別の教科の道徳の授業展開について
- ・相模原市のICT環境を生かした授業づくりの更なる実践

本研究会では、このような今日的課題を踏まえつつ、視聴覚・情報教育の研究を通して豊かな感性を持ち、意欲的に学べる子の育成を目指し、今後も研究を重ねていく。



# あとがき

相模原市立小中学校視聴覚教育研究会

副会長 福田 雅 一

次期学習指導要領への移行を前に、日本各地でプログラミング教育への関心が高まってまいりました。学習指導要領の改訂に伴いプログラミング教育という言葉が現れたときには、多くの教員が驚いたことと思います。最近では、全国の多くの場所で、先進校等による研究会も開かれるようになり、多くの先生方が参加されるなど、関心の上昇に拍車がかかってまってまいりました。インターネットの情報網には、プログラミング教育という言葉が溢れており、宣伝等も含め非常に多くのサイトが作られています。これに呼応するかのよう、小中学生を対象としたゲームプログラマー養成塾が、先日テレビで話題を取り上げられておりました。

文部科学省は、プログラミング的思考を育てるものとしていますが、海外の様子を見ると、国際的産業となる ICT 分野において、将来不足するプログラマーを育成することが、この発端となっていることもあり、コンピューター操作と強く結び付きを持って ICT 産業から発信されていることが、逆にプログラミング教育を難しく感じさせる要因となっているように感じます。各教科の中でプログラミング的思考を育てる取り組みは、多くの発想と継続した取り組みの中から探って行かなければなりません。しかもこれは今現在からみた未来の予想に立ってのことですから、今後の ICT 機器の更なる発展に伴い、その取り組みはますます変化してくるでしょう。特に機器の活用を苦手とする先生方にとっては、従来の教育活動に加えての変化への対応は大きくなり、余計に多忙感、不安感は募らせるばかりとなってしまいます。それ故、相視研の研究は益々重要になってきています。視聴覚・情報機器活用の有用性ととも操作負担の軽減を探り、市内でのより多くの教員による活用を広げていくことも担っていかねばならないと考えています。

本研究会では、研究主題に「児童・生徒の豊かな人間性・社会性の育成をめざした、視聴覚・情報教育はどうあるべきか ～新しい教育メディアを利用した視聴覚・情報教育の実践」とし今年度も研究に取り組みました。多忙を極める教育活動の現場で、研究に取り組んでまいりました。本年度は研究部名を変更し、「メディアリテラシー教育研究部」「ICT活用研究部」「番組活用研究部」「中学校部会」と4つの研究部会ならびに「情報モラルハンドブック改訂班」により、さらにその取り組み内容を充実したものにできるよう取り組み、その結果を本紀要にて報告させていただきます。

最後になりましたが、相模原の児童・生徒のよりよい学習のために、今年度も本研究会の取り組みに多くの時間と労力をかけていただきました先生方、ならびにそれを支えていただいた関係各所の皆さまに心から感謝申し上げます。